

## 顔の大きさ知覚に関する唇の効果

田邊 怜美

物の形状に関する錯視研究は幾何学図形を対象に行われてきたが、近年それらの錯視を顔や身体の形状知覚にも当てはめることが出来るということが解明されてきた。特に顔認識では幾何学図形的な部分処理に加えて様々な要素が影響しあう全体処理が行われることが指摘されている。また、生物学的相関性(眉と目は皮膚や筋肉の組織でつながっているために、生物学的には眉の角度が上がっている時目尻も上がっている確率が高いなどの、身体に自然に生じる相関性)により、顔や身体の認知では対比効果よりも同化効果が現れやすいとされてきた。このような錯視効果と顔知覚と化粧を絡めた研究は目や眉といった目元に関するものが多いが、口元による錯視効果に関する研究は少ない。そこで本研究では口元に注目し、口紅を用いて顔の下半分の大きさ、すなわち頬から顎にかけての形の知覚への唇の影響について検証した。

実験1の結果、赤い口紅を塗ることは顔を小さく見せることが示された。さらに口紅を塗る横幅は顔の大きさへ同化効果を示し、横幅を狭く塗った赤い口紅は顔をより小さく見せる錯視効果を生じるさせることが明らかになった。これは、口紅で示される横幅が小さいと顎も細く見えることを意味する。先行研究で示された目・眉毛間の錯視と同じように、対比効果ではなく同化効果として現れたことは、顔の錯視では同化の錯視が生じやすいという仮説を支持する結果であった。また、顔の大きさへの唇の形状の効果は倒立顔では生じなかったことから、唇の形状が顔の大きさへ影響することは顔特有の現象であり、顔の全体処理に起因するものであることが示唆された。



図 刺激画像例(左:横幅を狭く塗った口紅, 中:横幅を広く塗った口紅, 右:口紅を塗っていない顔)  
口紅を塗った顔では小顔効果が得られ、さらに横幅が狭い方が顔が小さく見られた。

そして実験2では、赤い口紅による小顔効果と比べて、輝度が同じでも異なる色相の口紅(ピンク、ブルー)では小顔効果が得られなかったことから、口紅の色が知覚システムに影響し、錯視を生じさせていることが考えられる。この色相の結果を説明する理論はまだ存在しないが、口紅の顕著性や顔のゲシュタルトとしてのまとまり、生物学的相関性が関連しているとも考えられる。

本研究は顔の要素である唇からアウトラインである顔の大きさへの影響を初めて定量的に測定・検証したものであり、口元の化粧と顔の全体処理の関係を探る第1歩であった。本研究で得られた発見が顔知覚における要素情報と全体処理の関係性の解明および化粧知覚のメカニズムの解明に結びつくことが期待される。(基礎心理学)